

編集後記

平成30年は大阪北部を震源とする地震と、2つの台風により、神戸地区でもかなりの被害がでた災い多き年でした。そのような中でも、神戸市民病院機構に所属する4病院、すなわち神戸市立医療センター中央市民病院、神戸市立医療センター西市民病院、神戸市立西神戸医療センター、神戸市立神戸アイセンター病院では、神戸市民の命と健康を守るため地道な努力とともに、医療水準の着実な向上を目指した多くの取り組みが行われました。本誌には、神戸市民病院機構に所属する数多くの医療スタッフの努力と取り組みが、学会報告や論文発表としてまとめられています。また、主に若手医師による数多くの臨床研究の経過報告も含まれており、今後の学会発表や論文作成に期待がもたれます。

しかしながら、今回の紀要の白眉は、神戸市立神戸アイセンターの栗本康夫病院長による「網膜の再生医療」と名付けられた総説であることは異論がないところです。世界初のiPS細胞を用いた網膜色素上皮細胞の再生医療が、神戸市民病院機構において行われたこと、その結果が2017年3月にNew England Journal of Medicineにおいて報告され、世界的に注目を浴びたことは記憶に新しいことです。本総説においては、その患者さんの現在までの経過とともに、iPS細胞を用いた網膜細胞の再生医療に向けた道筋も示されており、市民病院機構のすべての医療スタッフにぜひとも通読をお勧めする

ものとなっております。またこのような高い水準の総説が病院紀要のために書き下ろされたことは私どもの誇りであります。そのほかに原著論文として、神戸市立西市民病院小児科の江口純治先生より「受診後早期に診断に至った発作性運動誘発性ジスキネジアの1例」という症例報告をいただきました。ゲノム医療、免疫治療が花盛りの現在においても、患者さんの命と健康を守るうえで、幅広い知識を持つことと、注意深い観察眼を養うことの重要性を改めて思い知らせる貴重な報告です。

今回の紀要も医療スタッフの努力とともに、神戸市民病院機構法人本部の多くの事務担当の方々のご尽力によって完成しました、心より感謝申し上げます。最後に、本紀要は神戸市民病院機構のアクティビティーそのものです。病院外部の方々からの評価にも用いられるばかりでなく、機構内で働く医療者の道しるべとして有効に活用されることを心から願います。

神戸市立医療センター中央市民病院 血液内科

石川 隆之